



望月 佛教大辭典

第七卷
索引



昭和十一年十一月五日 初版発行
昭和三十三年三月二十五日 増訂版発行
昭和五十六年九月十五日 十版発行



望月仏教大辞典 第七卷

定価 七千円

編纂代表者 塚本善隆

著作権所有者 沢本貫

発行者 沢本武

印刷者 伊藤育廣

有限会社八和印刷

発行所 株式会社世界聖典刊行協会

本部 〒170

東京都豊島区上池袋二丁目三九番十七号
電話東京(九一五)一〇七八番
振替口座東京二一四六〇〇六番

後序

佛教大辭典は當初編纂に著手してより、前後滿三十年の星霜を閲し、今や漸く其の完成を見るに至れり。回顧するに明治三十九年書肆文淵堂金尾種次郎氏は、文學士鈴木暢幸氏に日本文學中に現はれたる佛教の術語辭典を編纂せんことを依頼し、氏は東京下谷櫻木町の宅に於て其の編纂を企て、時々予の許にも來遊せられたることあり。同年秋金尾氏は豫約募集を行はんが爲に同氏に見本を作らんことを乞ひ、且つ予に見本所載の術語の起稿を依頼されたるにより、予は之を肯諾せり。是れ予が本辭典と關係を結びし始なり。蓋し最初は四六版數百頁の單なる小辭典發行の豫定なりしが如きも、予が關係するに及び、協議の結果、其の計畫を擴大して四六倍版約一千五百頁の大辭典を編纂し、別に又附録として佛教大年表二三百頁のものを出版することとし、同時に予及び鈴木氏の外に、ドクトル荻原雲來、文學士加藤玄智の兩氏を加へて四人の共編とし、南條文雄、村上專精、前田慧雲、高楠順次郎の四博士に序文を乞ふこととなし、此等諸氏の允諾を得、尋いで見本原稿を作製し金尾氏に交附せり。是に於て氏は辭典發行の計畫を發表し、特價甲種金六圓、乙種金七圓、丙種金八圓、刊行期限を四十年七月中とし、豫約募集を開始したるに、應募實に四千部以上に達したりと云ふ。

三十九年十一月予の宅を編纂所に充て、十數名の編纂員を雇用し、先づ其の第一著手として俱舎、唯誠

等の諸論、法華玄義、華嚴五教章、乃至釋氏要覽、八宗綱要等を涉獵して各種の術語を牒出し、又支那諸高僧傳、元亨釋書等に就き著名なる高僧を選擇し、其の他諸書より佛教關係の用語を採集し、當時在京の諸學者に廣く執筆を依頼し、編纂員亦各起稿を分擔し、内外相應じて以て編纂速成の計を講ぜり。四十年二月十日は豫約締切期限なりしが、金尾氏は其の翌紀元節に編纂員及び所外の執筆者等を麴町富士見亭に招待し、大晚餐會を開けり。當時頗る盛會にして、會するもの百數十名に上りしことを記憶す。

速成を方針とし、限るに期日を以てしたるに依り、諸方依頼の原稿は其の後續々として集り、四十年四月頃には既に幾千項目に達し、机上に堆積するに至れり。若し予が當時何等の筆削をも加へず、之を五十音順に配列し、印刷所に回附したらんには、豫告の如く同年七月中に製本出來せしやも知るべからず。されど諸稿を一閱するに、餘りに皆簡にして義を盡さず、又重複あり矛盾あり、文體も區區にして一定する所なく、實に雜然無統制を極め、如何にするも編者たる責任上、之を其の儘活版に附するを得ず。是に於て予は深く當初の速成方針の過れるを自覺し、始めて辭典の編纂が至難の業にして、雜誌等の編輯に同じからざることを知るに至れり。

蓋し辭典は學者を指導するものなるが故に最も正確なるを要し、隨つて其の編纂には細密なる考慮と多大の勞苦とを拂はざるべからず。特に佛教の辭典は彼の難解なる術語を平易に解釋し、且つ印度以來二千數百年間に於ける遺法傳播の史實、各種の信仰對象、高僧の事蹟、寺院堂塔、乃至行事風俗等に關する有らゆる事項を網羅し、一一明細なる解説を附するを要するものなるを以て、彼の一般辭典の編纂よりも困

難の度更に大なるものなり。加之、當時佛教辭典として兒島碩鳳氏の佛教字典、若原敬經氏の佛教いろは字典等ありしも、此等は渉たる小字典にして固より参考とするに足らず、佛教大辭典は予等の計畫を以て嚆矣となすが故に、編纂の方針方法等に關し特に苦慮を要すべきものあり。予は當初深く此等の事を思はず、無造作に本辭典の編纂を引受け、而も僅々七八箇月間に之が速成を約したるは、全く斯業に對し無經驗なりしが爲にして、甚だ輕率の舉たり。是に於て予は堅實に漸進するの外、他に方途なきを痛感し、同時に亦最初の小項目列舉主義は大辭典の名にふさはしからず、佛教の術語の如き、其の語原より語義の變遷發達に至る過程を明にせざれば、眞に其の意義を知るを得ず、信仰の對象たる諸佛菩薩、乃至行事風俗等も各皆其の起原沿革を詳にせざれば研究の用を充たすに足らざるを思ひ、新に大項目主義を採用し、此の方針に依りて諸稿を統制整理し、以て名實共に佛教大辭典たらしめんことを期待し、編纂員と共に夜以て日に繼ぎ努力精進する所あり。然るに四十年六七月以後、書肆文淵堂は早くも資金に窮乏し、月々所要の編纂費を支出するを得ず。予は時に辭典の前途に對し頗る危惧の念を懷きたるも、遽に編纂を中止するに忍びず、自ら他借して一時の急を辨ずる所あり。當時金尾氏は資金の調達に奔走したるも意の如くならざりしが如く、同年冬に至り大阪の同業者と稱する某氏を伴ひ來り、今後の出資は同氏に於て負擔すべきに依り、之を信賴して編纂を進捗せんことを乞へり。然るに其の後某氏出資の實なく、依然として所要の月額不足せしを以て、予は諸方に他借して兎も角編纂を繼續せり。

四十一年夏に至り、金尾氏は予に今後の編纂費を取換支出し、四十二年八月迄に編纂を完了せんことを

乞ひたるを以て、予は姻戚の者に資金の融通を依頼し、遂に之を肯諾せしが、然るに其の後幾くもなく金尾氏は書肆武揚堂小島棟吉氏を伴ひ來り、資金借用の關係より辭典發行の權利を小島氏に譲渡し、今後の經費は同氏に於て支出すべきことを告げ、小島氏亦確諾したるを以て、予は欣然として之を迎へ、編纂費及び予の取換辨濟に關する協定をなし、同年十一月小島氏との間に契約を交換せり。是に於て前途の光明を認め、再び編纂員を増加し、尋いで原稿を印刷所に廻附し、翌四十二年三月始めて辭典第一卷三百二十頁（アよりキに至る）を刊行せり。

又之より先き辭典の完成は時日を要するにより、先づ附録佛教大年表を別冊發行し、書肆をして資金の回收を速ならしめんと欲し、既に其の編纂に著手せしが、第一卷成るに及び、更に全力を傾注し、乃ち佛陀降誕以來二千五百年間に於ける東洋各國の有らゆる佛教關係の史料を蒐集網羅し、又印度各時代の王統、各宗各派の傳承脈譜、本邦諸大寺の歴代住持譜等を編次し、同年十二月四六倍版約六百五十頁の佛教大年表を出版刊行し、越えて又四十四年九月更に辭典第二卷三百五十二頁（キよりケに至る）を發行するに至れり。今左に明治三十九年以來、辭典各語の執筆並に年表の編纂及び校正等に從事せられたる諸氏の芳名を掲ぐ。

文學士	鈴木暢幸氏	文學博士	萩原雲來氏	文學博士	加藤玄智氏
	大村西崖氏		竹石耕善氏		今岡達音氏
	大谷愨成氏		松田貫了氏	文學博士	小野玄妙氏

秋山悟庵氏 文學士 佐伯興人氏 文學博士 本田成之氏

服部俊崖氏 藤井大太郎氏 岡見宗信氏

山田孝道氏 塚原周峰氏 文學博士 上杉文秀氏

河野法雲氏 福田堯穎氏 加藤觀澄氏

末廣照啓氏 遠賀亮中氏 大宮孝潤氏

文學博士 常盤大定氏 文學博士 鷲尾順敬氏 釋慶淳氏

藤本淨本氏 久松鑽瑞氏 平澤謙純氏

森部逞禪氏 島地大等氏 楠原龍誓氏

清原秀惠氏 舟橋水哉氏 長澤諦遵氏

玉代勢法雲氏 河邊慶緣氏 和田龍造氏

泉芳璟氏 茜部忍氏 江部藏圓氏

文學博士 大屋徳城氏 楠秀丸氏 妻木直良氏

禿氏祐祥氏 梅田謙敬氏 泉道雄氏

内田宏道氏 望月歡厚氏 小笠原日毅氏

梶川乾堂氏 岡田桂岳氏 岡田宜法氏

田中海應氏 塚本賢曉氏 阿部全鼎氏

平子 尙氏	工學博士	伊藤忠太氏	工學博士	關野貞氏
結城素明氏		名越國三郎氏		田中智肇氏
白石芳留氏	文學博士	櫻井秀氏		大瀧靈超氏
村上運梢氏		今津洪嶽氏	文學士	神林隆淨氏
水谷承信氏		岩崎敲玄氏	文學博士	長井眞琴氏
三長覺靜氏		大野法道氏		石井教道氏
高瀬承巖氏		岸信宏氏		其他數氏

然るに上述の如く辭典は既に大項目主義に改めたるを以て、其の各語は殆んど皆新に起稿せざるべからざるに至り、進行實に容易ならず。且つ其の結果として自ら頁數の増加を來し、既刊一二兩卷合して六百七十二頁を算するも、唯アよりケに至る九音を了せるに過ぎず、最後のワを了するには當初豫定の二倍若しくは三倍にも上るべく、随つて多くの歳月と巨額の經費とを要するは明かなり。書肆は内容の如何を問はず、一に編輯完了の速ならんことを希望するに反し、予は縦ひ時日を要するも、内容に於て有る程度の充實を期せざるべからずとし、爲に兩者の立場一致せず、再び前途に暗影を投ずるに至り、予は時に斯かる大事業は打算主義功利主義者に依りて遂行し得らるべきものに非ず、必ず強力なる大乘主義の後援を持つて始めて成就すべきものなるを思ひ、四十四年春之を東京美術學校教授大村西崖氏に謀るに、氏は大日本佛教全書の刊行を企て、之に依りて資金の融通を得、一面に亦編纂に要する参考書を獲得せば可ならん

と提議せられたるにより、予は其の名案を得たるを喜び、更に高楠博士を訪うて其の計畫を語り、氏も亦大に協力すべきことを快諾せられたるを以て、是れより南條文雄、弘津説三、石川照勤、佐伯隆運、修多羅亮延、野澤俊岡、松濤松巖、本多淨巖、千葉満定、笠原立定、河瀬秀治、岡田治衛武等の諸氏に乞うて出資を得、同年九月佛書刊行會を組織し、高楠、大村の二氏及び予の三人主事となり、南條博士を會長とし、翌大正元年一月大日本佛教全書刊行趣旨を發表し、發行事務は大村西崖氏之を擔任し、其の事務所を牛込同氏の宅に置き、編輯事務は予之に當り、自宅を編輯所となし、同年五月以來、毎月菊版約五百頁の書二冊宛を刊行せり。尋いで大正三年四月に至り、大村氏は第一期事業既に完了せしを以て、出資者に對し其の全額を還附し、組織を變更して之を隆文館草村松雄氏に委し、次いで武揚堂小島棟吉氏亦發行事務を擔當し、同八年春に至り佛書合計一百三十五冊、外にコロタイプ版圖像抄十卷を印行せり。時恰も世界大戰の影響を受けて諸物價騰貴し、豫約者漸時減少せしを以て一時中止せしも、闕卷少からず、叢書完結せざるを恨み、大正十年九月予自ら續刊を企て、十一年十一月に至り、更に十五冊外に目錄一卷を刊行し、總數一百五十一冊となし、兎も角本邦空前の大結集たる大日本佛教全書を完成せり。

惟ふに佛書刊行會は元と辭典後援の目的を以て計畫せられたるものにして、最初は會の編輯部と辭典編纂部とを區別し、會の支持を受け、各其の事業の進行を圖りたるも、會の事務たる月々一千頁以上の編輯は實に容易ならず。先づ古書珍籍を搜索蒐集し、次に騰寫又は撮影し、異本と校合し、之を印刷に附し、更に校正を加ふるものにして、自ら一種獨立の大事業たり。隨つて多數の人功と多額の經費とを要し、特

に大正三年組織變更以後、辭典は大なる助勢を受くるを得ず。同五年十二月に至り、漸く第三卷三百二十頁(コよりサの始に至る)を發行し、尋いで又サ以下百數十頁を脱稿し、之を印刷所に廻附したるも、遂に第四卷の發行を見るに至らず。佛書刊行會の第三期以後に於ける不振閉鎖と共に再び中止の已むなき事態となれり。

大正十五年春に至り、元と刊行會の編纂員たりし現大正大學幹事高瀬承嚴氏は辭典の中絶を遺憾とし、財團法人啓明會幹事笠森傳繁氏を通じ、辭典編纂補助金下附の事を依頼せられたるに、幸に同會の容るゝ所となり、同年七月以後、年額金貳千圓宛三ケ年間交附せらるゝことゝなれり。予は當時更生の感を抱き、此の機會に宿志を達せざれば終生完成の期なかるべきを思ひ、往年數次の失敗に鑑み、編纂の方針及び進捗の方法を慎重考慮し、先づ第一着手として篋中に堆積せる未刊の舊稿を整理し、又廣く各種の辭典等を抄獵して語彙を追補し、努めて東西洋に於ける近代的研究の成果を網羅し、且つ梵語巴黎語は勿論、西藏語をも悉く参照して術語の意義を明にし、又佛教が東洋各國の文化に及ぼせる影響、并に其の美術工藝に關し特に主力を注がんことを期し、其の準備を開始する所あり。時に京都須賀隆賢氏(現東山中學校長)は辭典再舉の事を聞きて賀意を表し、同時に啓明會の補助金のみにては恐らく亦不足を生ずべく、此の際有志の贖金を募り、後顧の憂なからしむるを要すとなし、金五十圓を予に寄贈せられたり。此の須賀氏の厚意が動機となり、同年冬東京竹中門戒、坂戸彌一郎等の諸氏は佛教大辭典編纂後援會を起し、一口金五十圓とし、廣く篤志者に勸募せんことを企て、文學博士村上專精氏を會長に推戴し、淺草育英會を事務所と

し、各方面に依頼狀を發せられ、遂に二百數十名の應諾を得たり。予は既に啓明會の補助を得、今亦後援會組織せられ、辭典の編纂に關し更に懸念すべきものなきに至り、深く其の厚情を感謝し、後援會諸氏に對して、辭典發行の上は每冊之を贈呈せんことを申送れり。

當時予は大正大學學部長の職を奉じ、又授業を擔當し、日日繁忙なりしを以て多く編纂の業を見るを得ず。仍て翌昭和二年三月學部長を辭して編纂に従事し、所員を増加し、各其の堪能に隨つて分擔を定め、舊稿あるものは之に就いて修補を加へ、無きものは新に起稿し、一一關係の出典を加へしめ、然る後予自ら精細に之を披閱し、足らざる所は之を補ひ、剩す所は之を削り、更に引用の原文に就き誤脱なきかを檢し、矛盾を避け、文體を整へ、以て全編の統制を期する所あり。當初高楠博士は再び挫折せんことを慮り、往年の刊行に係る約一千頁分は何等筆削を加へず、其の儘新第一卷として發行すべきを勸告せられたるも、此等は既に二十餘年前の舊稿に屬し、爾後異常の發達を遂げつゝある現下の佛教研究を裨益するに足らざるを思ひ、遂に最初の第一頁より徹底的に修正改竄を加ふることゝなせり。然るに昭和三年冬予偶病を發し、臥床三月、後數旬の靜養を要するに至り、尋いで「淨土教の起原及發達」の校訂出版の迫れるあり、五年四月又大正大學學長に就任したる等の爲に、荏苒時日を遷延するの止むなきを致せり。

加之、當時印刷發行の事未だ定まらざりしが爲に高楠、姉崎兩博士を煩はし、諸方面に交渉を開始したるも、辭典發行には巨額の資金を要し、且つ原稿未だ全く完成せざるの故を以て、之に應ぜんとするものなし。又時に東京坂田良弘、本多淨嚴、函館小川徹龍の諸氏も予の爲に種種畫策せらるゝ所ありしも遂に

成るに及ばず。是に於て予は萬止むことを得ず、獨力經營出版を決意し、小川氏等に資金の融通を乞ひ、遂に昭和六年一月合資會社精興社印刷所と契約を結び、第一卷の組版を開始することゝなれり。時に精興社は本辭典組版の用に供する爲め、新に六號活字母型を製作し、又光藝社は各種の凸版及び寫眞銅版、田中雅泉堂はコロタイプ、日本美術印刷所は原色版、倉科英美堂はオフセット印刷を各擔當し、斯くて製版略ぼ成れるを以て、同年十月見本を製し、廣く之を江湖に頒布して讀者を募集し、越えて十一月始めて新第一卷一千餘頁を刊行することを得たり。仍て啓明會理事長大久保侯爵を経て、謹みて一本を天覽に供し奉り次いで後援會諸氏にも亦之を呈送せり。

爾後編纂は著々として進捗せしも、何等資力なき予が圖らず印刷發行の重責を負ふに至り、一時頗る前途を憂慮せしが、京都石井龍善、大阪六花眞哉、瀧川秀音、桃野春興、長谷川順孝、河原秀孝、松屋良友、堺松濤智鑑、尼ヶ崎三枝樹貫道、西宮佐藤覺雄、神戸明石福成、百合學雄、滋賀柴田玄鳳、名古屋鈴木眞順、函館小川隆誠等の諸氏は予が辛苦を察し、進んで讀者の勸募、配本斡旋等の勞を取られ、又京都信ヶ原良哉、滋賀井野亮秀、神戸濱田賢隆、明石福成、菊水吉之助、京都佐藤德善、西宮阿部榮全、青森楠美龍祥、東京渡邊義遠、福島宗川宗滿、滋賀酒井立順、神奈川竹石耕善、東京岩崎敵玄、神戸小野田愷定、東京野澤俊岡氏遺弟、群馬鈴木靈眞、大阪六花眞哉、西宮阿部常榮、京都中島隆敬、東京坂田良弘、尼ヶ崎三枝樹貫道、長野袖山榮道、神戸吉村立壽、京都山下大僧正御遺志、神戸三好立信、東京阿川貫達、廣島藤田大信、奈良康成達倫、岡山漆間德定、千葉田中智肇、福岡筑場義定、栃木大島彦信、滋賀片山了仙、

東京椎尾辦匡等の諸氏は各皆淨財を恵施して激勵を加へられ、家に在りて妻彌生内助し、予をして専ら編纂に従事することを得しめ、斯くて昭和七年九月第二卷、同八年十二月第三卷、同十年三月第四卷、同十一年八月第五卷を發行し、五卷總計五千八十八頁、凸版一千四百八十四個、外に寫眞銅版、原色版、コロタイプ版二百九十四葉一千六百餘圖、并に兩界曼荼羅凸版大版二葉を附し、爰に始めて辭典本文を完了することを得たり。又本年一月より別に本文の内容索引製作に著手し、初め約十萬語を牒出せしが、後之を精選して約半數となし、又梵語及び巴黎語索引を製し、且つ印度西域支那本邦等に於ける精細なる佛教分布地圖十二葉を附して之を別卷約二百八十頁となし、今十月中旬を以て刊行頒布するを得るに至れり。

今昭和元年新辭典編纂開始以來、日夜予の宅に於て、編纂員として執筆并に圖畫を分擔せられたる諸氏の芳名を左に掲ぐ。(入所順)

文學士	酒井立順氏	文學士	佐々木隆彦氏	螺澤辦明氏
文學士	寺沼武一郎氏	文學士	池田英淳氏	神島祐光氏
文學士	金山正好氏	文學士	清水亮昇氏	小鹿龍彦氏
文學士	土田勝彌氏	林	吽海氏	裏辻憲道氏
文學士	山田義雲氏	文學士	諸戸素純氏	後藤大用氏
文學士	岸覺勇氏	文學士	香月乘光氏	藤浦慧嚴氏

其の他、大正大學教授今岡達音、同大野法道、同石井教道、同高瀬承嚴、同吉井泰順、塚本賢曉、三浦

義薰、文學士阿部文雄、渡邊泰道、文學士清水善瑞、同關口慈光、同石井亮薰、同安永辦哲、同酒井孝英の諸氏も各皆執筆寄稿せられ、文學士遠藤圓乘、同宮崎善雄、同中林義英、同森哲雄、同田中周光、同前田成孝、宮田歳の諸氏は校正に従事せられ、又文學博士井上哲次郎、同高楠順次郎、同荻原雲來、河口慧海、文學士石田幹之助の諸氏は時々有益なる指導を與へられたり。

本辭典の編纂及び發行の經過大略斯の如し。之を要するに明治三十九年金尾種次郎氏の發願によりて本辭典の編纂は開始せられ、次いで予其の編纂を擔任することとなり、後幾多の事情の爲に金尾氏退き、小島氏退き、遂に予自ら印刷發行の責務までも荷はざるべからざるに到り、其の間具さに辛酸を嘗め、時に或は誹謗を被り、或は誤解を受けしことも少からず。呼乎惡戰苦鬪滿三十年、端なく後半生を斯業の爲に捧げ、白雪頭に盈ち、齡將に古稀に幾からんとして辛うじて宿志を達するを得たり。今に於て過去を顧みて實に感慨無量なるものあり。惟ふに辭典の編纂は至難の業にして、實際之に従事したるもの外、艱苦の度を知るを得ず。況んや本辭典の如き、最初より有力なる資源を有せざりしものに於ては、其の艱苦實に言語に絶するものあり。日本百科大辭典は前後二十二年の歳月を費し、爲に書肆三省堂が破産せしことは、辭典編纂の難事たることを雄辯に物語るものといふべし。予は昭和以後幸に啓明會并に大方の大乗的後援を受け、辭典本文及び索引約五千四百頁を刊行し、別に既刊附録佛教大年表六百五十頁を合せ、總計六千頁を突破し、實に當初計畫の四倍の量に達して以て本事業を完結し、加之、本辭典の副事業として大日本佛教全書二百五十冊、外に別巻及び目錄合計一百六十一冊を印行し、古書珍什凡そ九百五十三部三千

三百九十六卷を収載し、聊か亦學者研究の料に資することを得たるは、窃に自ら快とする所なり。されど此等の果實は言ふまでもなく予一人の微力の致す所に非ず、悉く上記諸先輩諸友人の指導協力、同情援護の賜物ならざるはなきを思ひ、爰に謹みて深甚の謝意を表する所なり。

昭和十一年十月下浣

編 者 望 月 信 亨 識

凡例

- 一、本索引は辭典所載の各項目を始め、本文中の重要な成語、具名、略名、異名、徽號、謚號等を牒出せしものなり。但し梵語及び巴黎語は別に之を表示す。
- 一、本索引の發音は本文に准じて口語音を用ひ、又數種の讀方あるものは概ね慣用音に従ふ。
- 一、本索引の編次は五十音順に依り、同音のものは字畫の數に依りて次第し、且つ音符に従つて類從せり。
- 一、各語の下に記入せる數字は本文の頁、上中下は其の段の異を示す。同一語にして二回以上本文に現はれたるものは、其の中の主なるものを選びて頁數を附し、且つ此の場合には本項目の頁を第一に記せり。
- 一、本文所載の各項目、并に其の右側にルビを以て示せる慣用音には符號 * を附せり。
- 一、冠字同一にして二種以上の發音又は和訓を有するものは符號 (↕) を以て他の音を示し、又特に難讀なるもの、若しくは特殊の讀方を有するものは、其の下に片假名を以て其の發音を示し、省略せる部分には符號 — を附せり。
- 一、本文所載の項目中、一語にして二種以上の意義あるものは、其の下に (二種) (三種) 等と記入せり。
- 一、同名同語にして其の表指する所異なるものは、括弧内に其の事由を記入し、努めて混同を避けたり。
- 一、捜査に便ならしめんが爲めに、別に冠字索引總目次並に冠字發音畫引を附せり。冠字索引總目次は本索引所載の冠字を五十音順に配列したるものにして、冠字發音畫引は冠字の總畫數に依りて其の發音を知らしむるものなり。
- 一、本文中に誤植あるものは本索引に於て之を訂正せり。